

講師プロフィール

萩原朔美（はぎわら さくみ）



1946年11月14日東京生まれ。映像作家、エッセイスト。多摩美術大学名誉教授。金沢美術工芸大学客員教授。母は小説家萩原葉子、母方の祖父は萩原朔太郎。

寺山修司主宰の演劇実験室・天井棧敷の立ち上げに参加し、1967年4月に旗揚げ公演となる『青森県のせむし男』で初舞台。その後、丸山明宏（三輪明宏）との共演作『毛皮のマリー』での美少年役が大きな話題を集める。俳優活動の後、1968年『新宿のユリシーズ』にて演出を担当し、以降同劇団の演出家を務めるようになり、代表作に『書を捨てよ町へ出よう』『時代はサーカスの象にのって』などがある。

演劇実験室・天井棧敷在団中から映像制作を開始し、退団後も、時間や記憶をテーマにした映像作品を制作。榎本了亮、山崎博、安藤紘平らとともに実験映画作品を精力的に制作、世界各地で上映会が開催される。1973年8月アメリカ国務省の招聘により渡米し、帰国後、アメリカ文化センターでビデオアートの現在について講演、1975年に株式会社エンジンルームを設立して、代表取締役役に就任。雑誌『ビックリハウス』をパルコ出版より創刊し、初代編集長を務める。パルコ文化、渋谷系サブカルチャーといった文化を生み出し、牽引する。

著書に『「演劇実験室・天井棧敷」の人々』（2000年）『毎日が冒険』（2002年）『死んだら何を書いてもいいわ』（2008年）『劇的な人生こそ真実』（2010年）他多数。一昨年、世田谷美術館に、版画、写真、本のオブジェ 130点が収蔵された。2016年4月より前橋文学館館長。2023年7月より前橋市文化活動戦略顧問。